

## 江戸の食べ方 互助的生活保障制度 郷蔵 ころくら

郷村に設置された穀物倉庫。  
江戸時代、年貢米の保管用に建てられたのはじまり。

年貢米は収穫後、各村の郷蔵に納められたのち、幕領で江戸・大坂の幕府蔵へ、藩領では藩庫や市場へ回送された。江戸中期以降は、こうした年貢米の一時保管に加え、備荒政策の展開にともない貯蔵として利用された。農民から供出された穀物が備蓄され、災害時に救済用に貸し付けられた。はじめ村役人の私蔵を利用することが多かったが、不正な出穀が発覚したため、幕府は寛政元年（一七八九）年

村負担による郷蔵の建造を命じた。蔵の管理は村役人にゆだねられ、貯蔵・出穀の状況は帳簿に記帳された。

『山川 日本史小辞典』より

## 江戸の食べ方 互助的生活保障制度 社倉米 しゃそうまい

災害や飢饉などの非常時に備えて米を備蓄しておくことを困米（かこいまい）というが、この困米を保存しておく倉が社倉である。

社倉とは別に義倉という言葉もある。社倉は、民衆が一人ひとりの財力に応じた分を困米として出し合い、管理

も民間で行う倉。

義倉は、そうしたことを公的な機関や富裕な人物が民衆の救済のために施す場合に使われる。

寛政の改革で松平定信は七分積金の制度をつくり、この制度を運用するために浅草の向柳原（むこうやなぎわら）という所に江戸町会所が建てられたが、これも社倉のひとつ。七分積金で積み立てられる金や米は地主や家主から支出された。

飢饉のときの対策や貧民救済のために予備の食糧を倉に保存しておくというところは、中国の隋や唐の時代の例にある。

『日本史用語集』より

## おぎゅうそらい 荻生徂徠

寛文六年（一六六六）  
享保十三年（一七二八）

江戸中期の儒者。徳川綱吉の侍医方庵の子。林春斎・林鳳岡に学ぶ。のち柳沢吉保に用いられ、「古文辞学」を大成した。また私塾護国（けんえん）を開いて多くの門弟を育てた。著書は『論語徴』『護随筆』『政談』等多数。

徳川儒学は林羅山らが朱子学（宋学）にもとづいて幕藩体制と封建思想をかためるために組み上げてきたが、徂徠はこれを批判し、古代中国の古典『論語』や四書五経、朱子学の文言を読みなおし、新たに解釈を変えようとした。

徂徠が説く「古文辞学」は古典と文辞の「もと」を重視する。先王君主の考え方を称揚した孔子前後の諸子百家たちの原文（古文）に戻って、「儒の理想」を思索をしようという立場のことをいう。著書『論語徴』では、「古へに云く、古今に通ず、これを儒と謂ふと。又云く、天地人に通ず、これを儒と謂ふと。故（まこと）に華和を合じてこれを一にするは、是れ吾が訳額。古今を合してこれを一にするは是れ吾が古文辞の学なり。」とある。すなわち、「華和（かわ）を合じて」、中国の漢学（華）と日本の和学（和）を合わせ、そこに古昔と現今とを合わせた意味（意義）を読みとるとというのが古文辞学だということ。

理屈だけではなく、日本の実情を現

実の実務政治に時務策に反映させていく日本儒学に道を拓いた。

柳沢吉保や八代將軍・徳川吉宗への政治的助言者でもあり、吉宗に献上した政治改革論の意見書『政談』は、徂徠の政治思想が具体的に示されている著書として知られている。

「道として民を利することができなければ、それを道と呼ぶことはできない」天下を治める道とは、民が安心して生活できること（経世済民）であり、そのためには儀礼・音楽・刑罰・政治などの制度（礼楽刑政）を用いて、人民の意見や才能を育み、發揮させることが肝要である。さらに、六経に記された礼楽刑政を知るためには、古文辞（古語）を学ばねばならないと唱えた。

# 江戸の竈

令和 三年  
睦月のころ

vol. 11



<http://fuyuki-lei.jp>



## 餅 雑煮

雑煮は中みそ又すましにても仕立候

もち とうふ いも 大こん いりこ

くしあわび ひらがつほ くきたち

など入よし

『料理物語』

寛永二十年（一六四三）

江戸中家々あらゆる如何なる貧苦の者にても、

正月元旦・二日・三日の三朝、

層蘇は汲まざるも、雑煮の調えなきはなし

『絵本江戸風俗往来』

雑煮ぞと引起されし旅寝かな

齋部路通

芭蕉門中の異色の人として知られる。成人後

晩年わずかな期間大坂に住んだほかは終生漂泊の身

だったらしい。芭蕉に出会って信従、『猿蓑』、など

の芭蕉撰集所収の作で活躍するが、乞食を自称する

風狂人で、その生き方に眉をひそめる向きもあり、

同門につまはじきもされた。漂泊の詩心が生んだ句

は、「鳥どもも寝入つてゐるか余呉の海」など、寂

寥をただよわせて捨て難い。提出の句は、漂泊児路

通の旅日記の一節、たんたんたる生活記録の句であ

る。

## 汁 とろろ汁

つくねいもの大きな芋を皮をむき

摺鉢にておろし 下すりをよくよくして

ふくさみそへだしを入れ煮立

よくさまし一杓子のべ とくと摺合せ

又一杓子のべとくと摺合せ 一度に二杓子いれず

摺様は摺木を摺鉢の

上の方へすり上げすり上げ 芋を摺切

摺切摺合する也 下摺悪しく又一度に

たれみそを多く入れれば 上ばかり泡にて下は澄む也

芋の頭 芽の所は入れず

此の如くすれば 下まで澄まず泡になるなり

摺様一通りの伝也 さて 鯉節をさめにておろし

青のりと合わせかけだす

『黒白精味集』

延享三年（一七四六）

梅若菜鞠子の宿のとろ、汁

松尾芭蕉

『猿蓑』所収。元禄四年正月、大津に住む芭蕉の

愛弟子乙州が、商用で江戸に下るに際し、乙州邸で

歌仙が巻かれた。その席で芭蕉が作った発句。旅立

ちへの祝意をこめた「物尽くし」の句である。「君

が通る東海道の道筋には、梅もあろう若菜もあろ

う、駿河の鞠子の宿にいけば、名物のとろろ汁も君

を待っている」という意味。梅や若菜は和歌の景物、

そこへぐんぐんとくだけたとろろ汁を配し、一気に

俳諧化した巧みさ。

## 菜 蛸江戸煮

江戸煮は一二寸に切 酒せんじ茶

当分にして久しく煮る 半にして

袖のわ切 漿さして煮る

『料理綱目調味抄』

享保十五年（一七三〇）

飯蛸のあはれや

あれではてるげな

小西来山

『今宮草』所収。人に殺される蛸のあわれを詠ん

だ句では、芭蕉が明石で作った「蛸壺やはかなき夢

を夏の月」が何といつても極めつきだろう。俳諧の

生命である滑稽の要素を含みつつ、同時に生の哀感

をみごとに表現している句である。しかし芭蕉とほ

ぼ同時代の来山は、飯蛸が煮られているのを見て作

ったと思われるこの句で、しみじみとした哀感より

はむしろ、俳諧精神の土台である諧謔ぶりを示して

いるといえよう。口語調が生きている。

『折々のうた』より